

★小学校の部 〈特選〉

ありがとうの大切さ

鷹巣小学校 三年 佐藤真凜

朝起きて、弟とけんかをしたりしかられたりしながらも、家族みんなと会話しながら楽しく食事をする。そんな毎日が当たり前だと思っていました。でも、家族が一人でもいなくなつたらちがいます。楽しいはずの食事の時間も、きっと会話がはずまなかつたり、さびしくてご飯を食べる元気がなくなるでしょう。いつもしかられる声がうるさいって思うけど、その声がなかつたら、きっとさびしいにちがいありません。

「命に終わりが来る」って言われたとき、人はどう思うのでしょうか。びっくりして、つらくて、大つぶのなみだが出てくるくらい悲しいでしょうし、大切な人をおいて天国に行くのはとても心がいたむと思います。わたしがこの本を読もうと思つたのは、大切な人のこしてなくなる人が、どんなことを考え、さい後におくる言葉をどう言おうかと思うのか知りたいと思つたからです。

ゾウのお父さんは、ある朝目ざめたとき、神様に命に終わるとそつと知らされます。家族とさい後まですごした日々は、子どもたちには短い時間だつたけれど、命を大切に

一日一日心をこめてすごした日々だつたとわたしは思います。

『ぞうのせ中』を読んで、わたしはこんなことがわかりました。それは「ありがとう」の大切さです。ゾウのお父さんは、子どもたちに「ぼくの所に生まれてきてくれてありがとう」ということを、お母さんには「のこしていく子どもたちをよろしく」って思つたんじゃないかな。そして、ゾウのお母さんや子どもたちは、お父さんゾウに対して「今までありがとうございました」という気持ちだつたと思います。わたしは、この本の中でみんなの「ありがとう」の言葉が一番好きです。そして、ゾウのお父さんがすごしたさい後の日も、とても心にのこりました。家族の大切さもしずかに伝わってきて実感されました。

わたしは「ありがとう」があまり□に出せません。うれしいと思つたときや感しやしたときは、心の中では「ありがとう」がたくさん出ているけど、□に出すのはまたちがいます。この本を読んで、小さいことでも、家族で「ありがとう」と言い合えば言い合うほど、きずなが深まつていくんだと思いました。

大切な人をおいて天国へ旅立つお父さんゾウと、のこされたお母さんゾウと子どもたちに、今までの「ありがとう」がいっぱいになりました。さい後にとつた記ねん写真は、家族の大変な、大事な宝物だと思います。ゾウのお父さんは、空の上からふり注ぐ日ざしになつて家族を見守っています。

この本は「ありがとう」の本当の意味を教えてくれました。心にいっぱいになった「ありがとう」を口に出して言い合うことは大切だと感じさせてくれました。家族のきずなは「ありがとう」でつながっているんだね。

講評

「命に終わりが来る」時に出る言葉が『ありがとう』で、その言葉が命ある時にも人ととのきずなとしての温かい大切な言葉であるのですね。このことが、読む人によく伝わるようになります。本を読んで感じたことを自分の言葉で書き表している、すばらしい表現力です。

小さな命

鷹巣小学校 四年 津谷 雄貴

これは目の見えない犬の話である。ぼくは、この本を読んで、もうどう犬は目の見えない人間を助けてくれるのに、どうして目の見えない犬は、人間にすてられるのだろう、と悲しくなった。

女の子に拾われた目の見えない犬のダンは、足で地面を確かめながら一歩一歩ゆっくり歩いた。せいいっぱい力をこめ

て、女の子の声をたよりに歩いた。全然目が見えないのに、声だけをたよりに歩くのはすごくこわいんだろうなあと思つた。

ぼくは、ダンの気持ちになつて目をつぶつて歩いてみた。目の前は真つ暗で、色々な所にぶつかつて転びそうになつて、とてもこわかつた。もし、これが外だつたらと思うと、不安でこわいと思つた。

ダンは、ぼくが目をつぶつて歩いた以上に大変だということがわかつた。ぼくも足をこつせつして足が不自由になつた経験があるので、ダンの大変さが少しはわかる。

だんボール箱の中にすてられていたダンを拾つた女の子が住んでいる団地は、ペットをかつてはいけないきまりになつていた。

「決まりは守るためにあるのでしょ。」

と言われたが、子どもたちはダンをかつて世話をあげることをあきらめなかつた。

「もうどう犬は、人を助けてくれているのに、どうして目の見えない犬を、助けてあげてはいけないのでですか。」

「目の見えない犬を、見殺しにしてもいいのですか。」と、大人に一生けんめいたのんだ。この場面が一番強くぼくの心にのこつた。

真剣にダンの命を守ろうとし、ダンをかうこと必死に願つた子どもたちに、大人は心をうたれ、ダンをかうことにさ

ん成してくれた。人間にも命があるように、目の見えない犬

にも命がある。ダンを助けてあげることができて、うれしかった。勇気ある子どもたちは、あきらめずにダンを守るために、よくがんばったと思う。ほくだつたら、勇気を出して大人を説得したり、ダンのために何かしてあげたりすることはできなかつたかもしれない。ダンの力いっぱい生きている人がたを見て、命を守ることがどんなことよりも大切だとわかつた。

ダンは目が見えなくとも一日一日をがんばって、生きている。目の見えない子犬を拾つてきた女の子には、みんなと助け合えば何でもできることを教えてもらつた。

ぼくには苦手なことがたくさんあるけれど、どんなことに

も一生けんめいがんばることができるかどうかが、一番大切なことに気付かされた。困っている人がいたら、相手の気持ちを考えて助けてあげたり、はずかしがらないで、すすんで手を貸してあげたりする勇気をもちたいと思つた。そんな心をもつた大人になりたいと思つた。

い思いが伝わつてきました。

ありがとうお母さんそしてソックス

鷹巣小学校 五年 松 尾 西 樹

わたしは、小さいころから、ずっと犬が好きで、いつも「犬がほしい」とたのんでいます。でも、お兄ちゃんも妹もアレルギーがあるので、その希望はかないません。自分は、アレルギーじやないけれど、兄妹のことを考えると、しかたないなあと思います。

「犬とわたしの10の約束」を読んでみようと思った理由は、そんな私の気持ちをゆらすような興味をひく表紙だったからです。それと、10の約束って何だろうと思ったからです。

このお話は、主人公のあかりが十二才のときに、子犬のソックスが家に来たところから始まります。そして、あかりが二十二才になるまでの十年間のお話です。十年間というのは、犬が生きられる平均寿命だそうです。

目の見えない犬の小さな命、人間も動物も、かけがえのない命をもつて生きていることを感じとつて、読み進めていました。相手の気持ちになつて考えることや、正しいと思うことをあきらめずやり通す勇気の大切さに気づいた雄貴さんの強

元気だったお母さんが、急にたおれて入院した日、ソックスが家に迷いこんできました。わたしは、あかりの、不安で心細い気持ちをなぐさめてくれるソックスが現れて、よかつたなあと思いました。あかりのお母さんも、きっとそんな気

持ちで、ソックスをかうことを許したんだと思います。でも、お母さんが、あかりと交わした10の約束を読んで、お母さんは、もつともっと深い気持ちで、ソックスをかうことにして、んだということが伝わってきました。

気長に付き合うこと、信じること、心がある、言うことを

聞かないときは理由がある…などの10の約束は、あかりに犬のことをよく分かつてあげられるように、一人でもしつかりお世話をがんばれるように、というだけでなく、人間として守つていかなければならぬ大事なことを教える、お母さんのゆいごんのようなものだと思います。特に十番目の約束の「死ぬときはそばにいること」は、ソックスのお世話を最後まで果たしてほしいという気持ちと、「自分ももうすぐ死ぬんだよ。」というお母さんのメッセージのようで、とてもかわいそうになりました。

ソックスは、あかりにとつて、かけがえのない存在になつていきました。でも、だんだん大人になつていくあかりは、ソックスのお世話もあまり熱心ではなくなりました。それでもソックスは、いつもいつもあかりのことを思い続け、そして亡くなりました。あかりはその時、やつと気付きました。お母さんとの約束を忘れていたことに。

動物よりも人間の心の方が変わりやすいのかもしれない。わたしはこの本を読んで思いました。時々、ペットが捨てられたニュースを聞きますが、最初はだれもが、かわいがつて

いたはずです。わたしだって、もしペットをかつたとしたら、きつとかわいがると思いますが、ずっとずっとその気持ちを持ち続けられるかは、ちょっと自信がありません。兄妹のアレルギーを理由にせず、10の約束を守れる人間かどうか、時々自分自身を振り返つてみたいと思います。

〈講評〉

樹さんは、お母さんとあかりの「10の約束」を、ただ犬を飼うための約束ではなく、人としての生き方を伝えるお母さんの言葉ととらえたのですね。樹さんが、この本を読んで自分自身を振り返るきっかけとしているところが、すばらしいです。

本当の強さとは

前田小学校 六年 斎藤巧美

相手の胸をグッとつかみ、自分に引きよせる。ハア、ハア。ぼくの荒い呼吸が相手の呼吸と重なりさらに大きくぼくの耳に響く。いつ技をしかけようかタイミングを見る。相手の足がぼくの視界に入る。さあ、今だ！ ぼくは、一気に足をかけ、相手の体の下に自分の体を入れる。

バタン！

ぼくが感動した場面は、シドニーオリンピックで初の金メダルをとり母の遺影とともに、表彰台に上がったところだ。

「やつたあ、一本だ！」

ぼくは四年生から柔道をやっている。一本勝ちほど気持ちいいものはない。ぼくはどちらかというと一本で勝つことが少なく、引き分けが多い。前までは、それに慣れていたせいかくやしさをあまり感じなかつたが、最近、くやしさを感じるようになつてきた。そんな時この本に出会つた。シドニーオリンピックで金メダルをとつた井上康生さんの挑戦を書いた本だ。

井上選手とぼくとを比べると大きくちがう点がある。それは小さい時からの環境だ。井上選手はお父さんが柔道の先生をやつていてすでに、五さいの時から道場に行つていたことである。読み始めた頃は、井上選手の強さはすでに柔道ができる環境のせいだと思つていた。しかし、そうではないことがだんだんわかつってきた。

それは、どんな相手にも真つ向からたちむかうところだ。

前へ、前へ、決して心はひるまない。井上選手が目指すのは

いつも一本だ。ぼくは相手が強いと「どうせ負けるかもしれない。勝てばラッキーだな。」という思いで試合をしている。決定的なちがいは一本をねらつていらないところだ。ぼくは、井上選手の強さは技のすごさもそうだが、そういう気持ちの強さではないかと思つた。

〈講評〉

巧美さんは、柔道を習つてゐるだけに、オリンピック金メダリストの井上康生選手の実話に心をひかれて読んだ様子が伝わつて来ます。井上選手から学んだ気持ちの強さを身に付けて、より一層練習に励んでほしいと思います。